小学生を対象とした「外国人に対する ステレオタイプに気づかせる授業」の開発・実践

鳥山 裕香　　塩田 真吾

静岡大学教育学部

本研究では、外国人児童の特に多い静岡県浜松市の小学生を対象に「偏った情報により外国人に対するステレオタイプを作っていることに気づかせる授業」の開発・実践を行った。そして、「メディアからステレオタイプができていることを理解する」「一部の情報から決めつけず、多くの情報から正しいものを選ぶことの重要性を理解する」といったメディアリテラシー教育から授業のあり方を検討した。本研究で開発した授業では、題材として「外国・外国人に対するイメージ」を扱い、また「日本人がどのように見られているのか」ということを考えさせる活動を取り入れた。授業前後の調査により、外国人との関わり方やメディアとの関わり方の双方の面で児童の意識の変化が見られたことが明らかとなった。

キーワード：ステレオタイプ、メディアリテラシー、異文化理解、外国人

1.　はじめに

1. 小学生における外国ステレオタイプの理解の重要性

現在、日本の小学校では多くの外国人児童を受け入れている。例えば、静岡県浜松市では、外国人児童就学支援員や外国人児童就学サポーターを派遣して児童生徒の学習や生活を支援したり、外部の団体に日本語・母国語教室を委託したりするなど様々な外国人支援事業が行われている[1]。しかし、外国人児童に対する学習面、生活面、精神面での支援体制が徐々に整ってきた一方で、外国人児童を受け入れている通常学級に在籍する日本人児童に対しての具体的な指導法や支援は示されておらず、日本人児童と外国人児童とが相互に理解し合い、より良い関係を築いていくには不十分といえる。

特に、日本人児童と外国人児童との出会いの場面に注目した際、日本人児童はメディアの一部から得た予め持っている知識やイメージに頼り、そのイメージに外国人児童を封じ込めてしまうことがあり、そこで外国人児童に対する間違った理解が生まれてしまうことになる。例えば、ブラジルからの児童が来た場合、「ブラジルではサッカーが盛ん」というイメージのみから、その児童自身もサッカーが上手であることを期待してしまう、というようなことがある。

こうした外部の人に対するステレオタイプについて金沢(1992)は、以下のように述べている。

> 「自分の所属集団の人たちに対するステレオタイプは、複雑で、より細密で、細かいことまで考慮されているのですが、一方、自分の所属する集団以外の人たちに対するステレオタイプは、単純で、大ざっぱになりがちです。そして、単純なステレオタイプほど極端になりがちな傾向があります。このため、自分の所属集団以外の人たちに対しては、「女性は……」、「アメリカ人は……」といった具合に、かなり個人差を無視した扱い方をするのに比べ、自分の所属集団に対しては、このような十把一からげ的な見方はせず、「○○さんは……」という風に、より個人的な見方をします。」[2]

同様に、浅井(1996)もステレオタイプの危険性について、「個人の特異性を無視し、極端に単純化や誇張化がなされたものであり、相手を個人として尊重した信頼関係を築く上での障害になる」[3]と述べている。

以上のことから、ステレオタイプは、ある集団について極端に単純化されており、その集団内の個人差を無視した見方であるとも言える。青木(2001)も断片的な印象から大雑把に類型的な形づけを行なってしまうステレ

Yuka TORIYAMA，Shingo SHIOTA
Development and Practice about “Lesson to Aware of the Stereotypes Against Foreigners” for Elementary School Students
Faculty of Education、Shizuoka University

オタイプ的な捉え方により、その国の人を一方的なイメージで決めつけ十把一からげでとらえてしまうと述べている[4]。個人差を無視し相手をその出身国によって分類しイメージを持ってしまうことは、相手の個人的な側面に対する理解を妨げる。そしてそれは偏見に結びつき、その国の人に対しての差別的な行動につながる危険性もある。

浅井(1996)は「人間が自分の周りの複雑な未知の外界に対して不安を覚え、その不確かさを少しでも減らそうと、今までに持っている情報をもとに分類し（categorize)、推測しようとする傾向」によってステレオタイプが発生すると述べている。ステレオタイプは誰もがもっているものであり、全てを無くすことはできないものであると考えられるが、メディアによって強化されるステレオタイプが個人差を無視し、偏見や差別をもたらす危険性を持っていることが指摘できる。

これらを踏まえると、小学校段階から一部の情報だけで外国のイメージが作られているということを理解し、同じ国の人でも様々な人がいると言うことをふまえて相手のことを正しく理解しようとする態度を養うことが必要である。

1.2. 先行研究の整理と研究の目的

これまでのステレオタイプ理解に関する研究を概観すると、小学校においては、「メディアが意図的に構成されていること」に気付くメディアリテラシーに言及したものが多く、意図的に作られた情報からステレオタイプが作られていることを理解する実践研究が少数ながら行われている。

例えば、大阪府守口市立八雲小学校代 6 学年での実践[5]である。この授業では、「大阪のおばちゃん」を題材として学習を行った。「子どもたちにメディアに流されずに本質を見抜く力を身につけさせ、さらには多様性を認めることが重要なのだと認識させる」ということをねらいとしたものである。この授業は、初めに「一枚の写真から、その写真の真意と背景を考える。写真は加工の仕方次第で様々に意味を変えることに気づく」。次に「「大阪のおばちゃん」は本当にイメージ通りかを検証」、そして「メディアに作られた「大阪のおばちゃん」像を見せる。」「情報は意図的に構築されているものだと知る。」というものである。この学習を通して、大阪のおばちゃんのイメージと、本当の姿を比較させる中で、児童はメディアが情報を意図的に構成していることに気付くことができた。

他方、小学校以外を対象とした研究に目を向けると，外国に対するステレオタイプを扱う授業実践の研究としては、浅井(1996)が駒澤女子短期大学英語科における語学教育の授業の中でステレオタイプを理解する学習の実践研究を行った。「ステレオタイプ」を異文化理解の重要なテーマであるとしてその学習の重要性を述べ、具体的な授業方法を提示した。学生は「経験」、「分析」、「一般化」、「応用」の四つの過程の流れの中で、体験的なアクティビティと一般的な原則や各々の体験を結びつけ、社会において様々なステレオタイプが存在し、その多くが間違っているということを実感した。

以上から、小学校においては、「メディアが意図的に構成されていること」に気付くメディアリテラシーに言及したものが多く、意図的に作られた情報からステレオタイプが作られていることを理解する授業が行われている。しかし、外国に対するステレオタイプを扱ったものは、小学校段階では散見の限り為されていない。

そこで本研究では、小学校における「偏った情報により外国人に対するステレオタイプを作っていることに気づかせる授業」の実践、考察をし、その成果を検討することを目的とする。

1.3. 研究の方法

まず、児童の実態をふまえ、先行実践例や先行研究でのステレオタイプを理解する手法を基に授業を開発する。そして開発した授業を浜松市立 J 小学校第 5 学年において実践する。

その際、授業の事前と事後それぞれにアンケートを実施し、外国人との関わり方やメディアとの関わり方に関する態度面の変化を分析する。また、ワークシートに自由記述欄を設け、自由記述からも評価を行うこととする。それらの授業実践の記録とアンケート結果の分析をもとに授業のあり方を考察する。

2. 静岡県浜松市内の小学校の児童の実態と授業の開発・実践

2.1. 児童の実態

現在、日本の小学校では多くの外国人児童を受け入れている。本研究の実践を行う静岡県浜松市では市立小学校に通う 44,059 名(平成 26 年 5 月 1 日現在)のうち 930 名の外国人児童が 101 の小学校に在籍している(平成 26 年 4 月 30 日現在)[6]。外国人児童の特に多い静岡県浜松市において、外国人児童と日本人児童の相互理解を深めるために、日本人児童に対しても異文化理解の観点からより深い指導を行っていくことが重要であると考え、静岡県浜松市の小学校での授業実施を行うこととした。

そこで、本研究の授業を実施する浜松市立 J 小学校 5 年 3 組の 28 名を対象に、授業実施 2 週間前(2014 年 12 月 1 日)にアンケート調査を行い、児童の実態を把握した。アンケートでは、①外国に対してどのようなイメージを持っているか、②外国人に対してどのような意識が

あるか、③メディア(特にテレビ)の情報に対する見方についてどのような意識があるか、の三点を調査した。以下にその結果を述べる。

まず、①外国に対するイメージの項目では、児童が比較的接する機会があると思われるブラジル、中国、カナダの三つの国についてイメージを調査した。「親しみやすい」、「綺麗好き」、「信頼できる」、「規則を守る」の 4 項目それぞれについてどの程度当てはまるのかを「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の中から一つ選択させた。その結果、ブラジル人については「親しみやすい」という項目では 28 名中 15 名が「そう思う」、「とてもそう思う」と回答したが、それ以外の「綺麗好き」、「信頼できる」、「規律を守る」の項目では「そう思う」「とてもそう思う」と答えた児童は 5 名以下となり、良い印象を持たれていなかったことが明らかとなった。自由記述での回答では、「サッカー」、「ネイマール」、「スポーツが得意」など「スポーツ」に関連することを答えた児童が 17 名と多く、ワールドカップなどのテレビの影響が大きいと考えられる。

中国人については、「親しみやすい」、「綺麗好き」、「信頼できる」、「規則を守る」の全ての項目で「あまり思わない」「まったく思わない」を選択した児童が 20 名を超え、中国人に対して悪い印象を持っている児童が非常に多いことが明らかとなった。自由記述での回答では、「サンゴの密輸」などを含め「ルールを守らない、悪いことをする」に関連した回答した児童が 28 名中 13 名おり、マイナスイメージが多いことが明らかとなった。ニュース等の影響の他、担任の教師が長縄の練習の際に「間隔を空けずに並ぶこと」を指導する際に「中国人に横入りされるよ。」というステレオタイプ的なイメージをもつような声かけをしたことがある、ということもあり「ルールを守らない」というイメージが強いと思われる。

カナダ人については「親しみやすい」、「綺麗好き」、「信頼できる」、「規則を守る」の全ての項目で 20 名以上が「そう思う」、「とてもそう思う」と回答しており、良いイメージを持っていることが明らかとなった。自由記述においては、記述がなくイメージを持っていない児童も見られたが、「親しみやすい」「美人」「おしゃれ」などが挙がった。児童らの外国語活動の授業を担当しているカナダ人の ALT の印象で回答したと考えられる。

次に②外国人に対する態度についてどのような意識があるかの項目における結果を述べる。「イメージが実際と違うと思う」では「とてもそう思う」「そう思う」を回答した児童が半数の 14 名であり、また「同じ国の人はみんな同じ」という項目では、「あまり思わない」「まったく思わない」を選択した児童が 28 名中 26 名で、ほとんどの児童が「持っているイメージと実際は違う」と認識していることが明らかとなった。しかし、外国人に対して「偏った見方をしている」ことに対して「そう思う」と答えた児童は 28 名中 4 名で、ほとんどの児童が「偏った見方をしている」とは思っていないことが明らかとなった。

③メディア(特にテレビ)の情報に対する見方についての項目では、「テレビの影響を受けている」の質問で、「あまり思わない」「思わない」と答えた児童が 15 名で半数以上いることが明らかとなった。また、「テレビは情報のすべてが放送されている」では「あまり思わない」「まったく思わない」と答えた児童が 27 名、「知りたい情報を得るにはテレビで十分だ」の項目では「あまり思わない」「まったく思わない」と答えた児童が 26 名であった。

以上の児童の実態調査の結果をふまえ、本研究の授業を行うことにより、外国に対して「偏った見方をしている」ことや、「テレビの影響を受けている」という点で特に児童の意識の変化が見られることを期待し、授業を開発した。

2.2. 授業の開発

本研究では「偏った情報により外国人に対するステレオタイプを作っていることに気づかせる」授業を実践する。授業開発の視点として 2 点挙げる。

1 点目は、「外国・外国人に対するイメージ」をステレオタイプの題材として扱うことである。メディアが一部の情報により構成され、そこからステレオタイプが作られていることを理解するメディアリテラシーの授業を行う。そこでの題材として「外国・外国人に対するイメージ」を扱うことによって異文化理解教育の面を取り入れることを意識した。日本人児童と外国人児童と関わりに注目した際、日本人児童はメディアの一部から得た予め持っている知識やイメージに頼り、そのイメージに外国人児童を封じ込めてしまうことがあり、そこで外国人児童に対する間違った理解が生まれてしまうことになる。そのため、一部の情報だけで外国のイメージが作られているということを理解し、同じ国の人でも様々な人がいるということをふまえて相手のことを正しく理解しようとする態度を養うことが重要である。本研究での授業では、外国の人がもつ日本人に対するイメージを紹介する際、自分たちの持つイメージの不確かさに気付いたり、間違った見方で判断された時の気持ちを想像したりすることによって、外国人を国のイメージにとらわれず正しく理解しようとする態度が身に付くと考える。また、決めつけたイメージを持たないために、多くの情報から正しく理解しようとする態度を身に付けることが異文化理解にもつながると考える。

2 点目は、「日本人がどのように見られているのか」

ということを考えさせる活動を取り入れることである。自分たちがどう見られているのかということを考え、それらのイメージ全てが正しいわけではないことを知ることにより、「自分たちの持っているイメージも違っているかもしれない」と、自身の外国に対しての見方を省みることにつながると考える。また、外国に対するイメージを扱うため、多くの小学校に在籍する外国人児童のことを考慮する必要がある。実態調査での記述で見られたような、「ブラジル人は肌が黒い」「中国人は悪いことをする」といった日本人の外国に対する悪いステレオタイプ的な見方を、授業の中で深く話し合うことで差別的な声が挙がり、外国人児童が嫌な思いをすることを避ける必要がある。以上のことから、「日本人がどのように見られているのか」ということを考えさせる活動を取り入れることを開発の視点の一つとした。授業で提示する外国からみた日本人のイメージについては、株式会社電通による「海外 16 地域での日本のイメージや興味・関心の調査」(2012)[7]とともに、静岡大学に通う留学生が挙げた日本人に対するステレオタイプを参考にした。

以上の開発の視点と児童の実態をふまえ、授業案の開発を行った。以下は、本研究で開発した授業の指導案と板書計画である。

【題材名】

「外国・外国人に関する情報とイメージ」

【授業のねらい】

外国人に対して一部の情報から固定的なイメージが作られていることに気付き、相手を正しく理解しようとする態度を養う。

【授業内容】(45 分)

（1）準備物　　提示物(アンケート結果)、ワークシート、ホワイトボード、ペン

（2）学習過程

過程	学習活動　○主な発問　・予想される反応	形態	・留意点
5分	**１．学級でのアンケートの結果を発表** ○なぜこう思いましたか。 ［国のイメージはどのように作られるのか考えよう。］	全体	・外国についてみんなが同じようなイメージを持っていたことに気付かせる。
5分	**２．日本人に対するイメージの紹介** ○アンケートの結果を見てどう思いますか。	全体	・どう思われているのかを知り、自分たちが持っている外国に対するイメージの不正確さや決めつけた見方で判断された時の気持ちを想像させる。
25分	**３．本時の学習** ◎なぜ外国の人は、日本人のことをこのように思っていると思いますか。 ワークシートに個人の考えを書く。(2 分) グループでホワイトボードにまとめる。(10 分) 全体で発表し、話し合う。(10 分) ○みんなが外国について思っているイメージは本当に正しいのかな？ ○間違ったイメージを持たないようにするにはどうしたらいいでしょうか。	個人 ↓ 班 ↓ 全体 全体	・「自分たちの外国に対する見方」と比べながら日本に対するイメージはどう作られるのか考えさせる。 ・一部の情報から偏ったイメージが作られ、間違ったイメージが出来てしまう可能性があることをおさえる。 ・周りの人と相談した後、発表させる。
10分	**４．本時の授業を振り返る。** ［身の回りの少ない情報だけでその国に対するイメージをつくってしまう。間違ったイメージを作らないために、色々な面から調べてその国について正しく知ることが大切。］ ・ワークシートに感想を書く	個人	

2.3. 小学校での授業の実践

授業は 2014 年 12 月 15 日に浜松市立 J 小学校の第 5 学年の児童 28 名を対象に 1 時間（45 分）の授業を、行った。授業の様子の一部，話し合いの部分を教師の発言を『』、子どもの発言を「」で示す。

『さっきみんなは、ブラジル、中国、カナダ、についてこういう風に思っているよって言っていたけど、じゃあ逆に、外国の人は、みんな、日本人のことをどういう風に思っていると思いますか。』と質問を投げかけた。

すると児童からは、「車とかも輸出しているから、機械をつくるのが上手いと思っていると思います。」、「車の生産量が世界一になったこともあるし、世界に通用する高い技術をもっている工場もたくさんあるから、日本は技術とかがすごい国なんだなと思っていると思います。」といった意見が挙がった。『車だけか』、と他の意見を促すと、「清潔とか、綺麗っていうイメージがあると思います。理由は、紅葉とか景色とか四季があるので、景色がいい所があるから、そう思いました。」、「寿司が有名なので、お寿司がイメージにあると思います。」、「日本の食文化は、低カロリーで身体に優しいような食べ物が多いので、身体に優しいような国だと思っていると思います。」といった意見が挙げられた。

ここで、『実は、先生の大学に来ている外国の方に、日本に来る前に日本のことをどういう風に思っていましたか、っていうのを聞いてみました。』と伝え、外国人からみた日本人のイメージ（よく働く、礼儀正しい、親しみやすい、時間や規則を守る、せい品が良くできている、おしゃれ、こだわりがある、細かいことを気にする、おとなしい、着物を着ている、すしを毎日食べている、メガネをかけている、アニメが大好き、サムライ、にんじゃがいる）を提示した。そして、『これを見てみんなどう思いましたか』と問いかけ、周りの人と少し相談する時間を約 1 分とった。相談後、思ったことを発表させると活発に意見が挙がった。児童から出た意見は以下のとおりである。

「親しみやすいは、あっていると思います。」

「16 個には悪いイメージは一つもないと思います。」

「着物を着ていると、サムライ・忍者がいるは、結構昔のことだと思います。」

「お寿司は有名だけれど、お寿司を毎日食べている人はいないと思うし、メガネをかけている人はあまり多いってわけではないと思います。」

「さっき予想した時に車が良くできているとかがあったので、外国の人もそう思っているんだなと思いました。」

「アニメが大好きは、東京の秋葉原にいる変な若者のことをイメージ付けられて、それでそういうことにイメージを捉えているんだと思います。」

「外国の人はそんなに細かいことを気にしないから、日本人はそう思うんだと思います。」、「全員が良く働くわけではないと思います。」

「小学生でも中学生でも大人でも、大人しくなくて暴れる人もいると思うから、おとなしいは違うと思います。」

「ブラジルとかそういう外国よりはおとなしいので、日本は外国から見たらおとなしいので、合っていると思います。」

「すごいこだわりを持っている人もいるし、こんな感じでいいやってこだわりがあまりない人もいるので、合ってないと思います。」

合っているイメージがあるが、全員に当てはまることではない、ということに児童たちがなんとなく気付いたようであった。『人による感じってことかな。』と問うと、うんうん、とうなずく姿が見られた。『これを見てだいたい合っているって思った人。』と聞くと挙手がなかったが、『全然合っていないって思った人。』と聞くと数名の手が挙がった。合っていることもあるけど、全員には当てはまらない、という点で、「合っている」という判断に迷っているようであった。そこで、『みんな礼儀正しいですか。』や『寿司を毎日たべますか。』と問いかけると、「いいえ」と口をそろえて返事が返ってきたため、違うイメージがあるということを確認できたと思われる。

図 1　班ごとの話し合いの様子

3.　アンケート調査の結果からみた考察

3.1. アンケート調査の結果と分析

まず、授業の事前と事後で子どもたちの意識にどのような変容があったのかを、授業の事前と事後のアンケート調査の結果から見ていく。なお、事前のアンケートは授業実施二週間前に行い、事後アンケートは授業実施日の翌日に行った。事前事後の変容を調査する項目として、「Q1.外国人についてどの程度当てはまりますか。」「Q2.テレビの見方についてどの程度当てはまりますか。」という二つの大きな項目を設け、外国人に対する意識の面と、メディアリテラシーに関する意識の面にお

いてどのような変容があるのかを調査した。

外国人に対する意識面の調査項目では、a.外国に対して偏った見方をしていると思う。b.外国に対して持っているイメージと実際の外国人は違うと思う。c.同じ国の出身の人はみんな同じ性格や行動をしていると思う。d.悪いイメージの国の人とは仲良くなれないと思う。e.外国人の転校生がきたら自分のクラスに来てほしい。の5 つの項目で「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」を選択させた。

Q1-a「外国に対して偏った見方をしていると思う。」に対して「とてもそう思う」「そう思う」と答えた児童は16 名(事前)から、20 名(事後)に増加した。また、Q1-b「イメージと実際は違うと思う。」に対して「とてもそう思う」「そう思う」と答えた児童も 14 名から、20 名に増加した。これらの結果から、授業の目標にも掲げた、「外国に対して決めつけた見方が作られてしまうことに気付くこと」ができたと考えられる。Q1-c「同じ国のひとはみんな同じ性格や行動をしていると思う。」では、事前調査の際にも「そう思う」と回答した児童は 2 名でほとんどいなかったが、事後では全員が「あまり思わない」「思わない」と回答しており、授業の中で「イメージがみんなに当てはまるわけではない」ことや「一人一人に性格がある」ということに気付いた結果が調査結果として表れたと言える。Q1-e.「外国人の転校生がきたら自分のクラスに来てほしい。」の項目では、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた児童が 5 名増加し、外国の人と積極的に関わろうとする態度を養うことができたと考えられる。

メディアリテラシーに関する意識面の調査項目では、a.自分はテレビの影響を受けていると思う。b.テレビは意図的に作られたものだと思う。c.テレビは、情報の全てが放送されていると思う。d.知りたい情報を得るにはテレビで十分だと思う。の 4 つの項目で「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」を選択させた。

Q2-a.「自分はテレビの影響を受けていると思う。」の項目では、「そう思う」と答えた児童が 13 名から 18 名に増加し、Q2-b.「テレビは意図的に作られたものだと思う。」の項目においても、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた児童数が 20 名から 24 名と増加した。児童たちがテレビによって影響を受け、外国のイメージをもっているということに気づけたと言える。Q2-c.「テレビは、情報の全てが放送されていると思う。」と Q2-d.「知りたい情報を得るにはテレビで十分だと思う。」の項目では、「まったく思わない」と答えた児童が減り、また「そう思う」「とてもそう思う」と答えた児童が 1 名増え、期待していた変容は見られなかった。

次に、ワークシートの自由記述欄「今日の授業の感想(分かったこと、気付いたこと、感じたこと)」における児童の記述から、子どもたちの意識にどのような変容があったのかを見ていく。上述の事後アンケートと同様、授業実施の翌日に記述したものである。

「情報によって外国のイメージが出来ていることが分かった」という記述が 28 名中 23 名、「一人一人に性格があり、国のイメージが全員に当てはまるわけではないと分かった」という記述が 18 名となっており多いことが分かる。実際に、「人には一人一人性格があるので、全体のイメージとは違うと気付いた」、「着物やサムライなどは昔のことで、まさに情報からのイメージだと思った。」、「ニュースでやっている海外の悪い人たちの行動でその国のイメージを決めつけてはいけないと思った」という記述が見られた。以上のことから、本研究の授業を通して、児童たちが「情報(テレビやインターネット、新聞、ラジオ、本)によって外国のイメージができていること」、「それらの情報が全て正しいとは限らないこと」、「国のイメージで一人一人を決めつけてはいけないこと」などを理解したと考えられる。

外国に対して間違った見方をしないためにどうしたらよいか、という観点では、「情報の全てを信じない」と記述した児童は約半数の 13 名いたが、「より多くの情報を集めたい」、「正しい情報を選びたい」という情報の見方を具体的に答えた児童が 28 名中 6 名と少なかった。同時に「実際に外国の人と話したい」といった自分の目で見て判断する、という記述が 14 名多く見られた。ある児童は、「テレビやインターネットに書いてあることは 100%あっているわけではないので、海外にいる人たちと話をしてみたいと思った。日本人の印象も僕と同じように一部の情報だけを信じて日本のイメージを決めていたので、本当の日本の状況を外国に伝えるということは大切だと思った。」と記述していた。このように、「外国のことをもっと知りたい」、「日本のことを伝えたい」といった回答もあり、外国の人と積極的に関わろうとする態度を養うことができたと考えられる。

ここで、以上に挙げたアンケートの集計結果の分析をし、本研究の授業実践が、児童が一部の偏った情報により外国ステレオタイプを持っていることに気付くことに有効であったのかを検討する。アンケートは 4「とてもそう思う」、3「そう思う」、2「あまり思わない」、1「まったく思わない」の 4 件法で行い、それらの回答を 4～1 点に得点化し、事前事後の結果に有意な差があるのかを調べる t 検定を行った。(表 1,2)

表 1 事前事後の変容調査(外国人に対する意識)

Q1 質問内容	事前	事後	P 値	
Q1-a. 外国に対して偏った見方をしていると思う。	1.71	2.78	0.00	**
Q1-b. 外国に対して持っているイメージと実際の外国人は違うと思う。	2.71	3.03	0.047	*
Q1-c. 同じ国の出身の人はみんな同じ性格や行動をしていると思う。	1.60	1.28	0.013	*
Q1-d. 悪いイメージの国の人とは仲良くなれないと思う。	2.50	2.53	0.43	
Q1-e. 外国人の転校生がきたら自分のクラスに来てほしい。	2.71	3.00	0.04	*

注：*p<.05, **p<.01, n=28

表 2 事前事後の変容調査(テレビの見方に関する意識)

Q2 質問内容	事前	事後	P 値	
Q2-a. 自分はテレビの影響を受けていると思う。	2.57	2.85	0.087	
Q2-b. テレビは意図的に作られたものだと思う。	2.75	2.96	0.092	
Q2-c. テレビは、情報の全てが放送されていると思う。	1.42	1.64	0.015	*
Q2-d. 知りたい情報を得るにはテレビで十分だと思う。	1.53	1.75	0.092	

注：*p<.05, **p<.01, n=28

外国人に対する意識の面では、「Q1-a. 外国に対して偏った見方をしていると思う。」(事前 1.71, 事後 2.78, p=0.00，（p<0.01））の項目については有意水準 1%以下の有意な差が見られた。また、「Q1-b. 外国に対して持っているイメージと実際の外国人は違うと思う。」(事前 2.71，事後 3.03，p=0.04，（p<0.05））、「Q1-c. 同じ国の出身の人はみんな同じ性格や行動をしていると思う。」(事前 1.60, 事後 1.28, p=0.01,（p<0.05））、「Q1-e. 外国人の転校生がきたら自分のクラスに来てほしい。」（事前 2.71，事後 3.00，p=0.04，（p<0.05））の三項目については有意水準 5%以下の有意な差が見られた。

テレビの見方に対する意識の面では、「Q2-c. テレビは、情報の全てが放送されていると思う。」(事前 1.42, 事後 1.64，p=0.01，（p<0.05））の項目については有意水準 5%以下の有意な差が見られたが、期待された変容が見られなかった。

以上の結果から、本研究の授業実践は、児童が外国に対して偏っているイメージであるステレオタイプを持っていることに概ね気付くことができ、人それぞれに性格がありイメージにとらわれずに外国の人と積極的に関わろうとすることができるようになるのに有効であったと言える。もちろん、最初からステレオタイプに気づいている児童もおり、そういった児童については変容が見られなかった可能性もあり今後の課題としたい。

また一方で、それらの外国のイメージがテレビの影響よりできていることや、多くの情報を集め取捨選択するといった情報の見方の変容をもたらすには効果的ではなかったと言える。

3.2. 授業実践の考察

以上の結果により①本研究の授業は、児童が情報によりステレオタイプが作られていることを理解するのに効果的であったこと、②本研究の授業を通して、児童が外国の人と積極的に関わろうとする態度を養うことができたこと、③本研究の授業は、外国の人を正しく理解するための方法として「メディアからより多くの情報を集め、取捨選択する必要がある」という理解には大きな効果が見られなかったこと、の 3 点が明らかとなった。

さらに，授業の開発の視点で述べた「外国・外国人に対するイメージを扱うこと」、「日本人がどのように見られているのか」ということを考えさせる活動を取り入れること」の 2 つの観点を中心に授業実践を考察する。

１点目は、外国・外国人に対するイメージを扱うことである。題材として「外国・外国人に対するイメージ」を扱ったことによって、メディアリテラシーの授業として、「一部の情報からステレオタイプが作られていることを理解」できたと同時に、外国人に対して「その国の人としてではなく一人一人として関わることや、実際に話して判断する必要があることを理解」できた授業にもなり、異文化理解教育の面でも効果があった授業にすることができたと考える。ただ、「メディアからより多くの情報を集め、取捨選択する必要がある」という理解には大きな効果が見られなかったため、メディアリテラシーの観点において「メディアから外国のイメージができている」という理解だけではなく、「外国について正しく理解するための情報の見方」にまで踏み込んだ授業をしていくことが今後の課題となった。

2 点目は、「日本人がどのように見られているのか」ということを考えさせる活動を取り入れることである外国に対してあまり知識がない児童たちにとっては、自分たちの持っている外国に対するイメージが正しいのか判断がしづらいが、「自分たち日本人のことがどう思われているのか」というイメージは実際の自分たち日本

人を比較することができ、「イメージが全ての人に当てはまらない」、「持っているイメージが正しいとは限らない」ということに気付くことができたと考えられる。アンケートの結果からも、本研究の授業では、イメージが全ての人に当てはまらないことや、自分たちの持つ外国に対するイメージの不確かさに気付くことができたと考えられ、「日本人がどのように見られているのか」ということを考えさせる活動は、外国に対する見方を省みるための活動として適切なものだったと考えられる。また、アンケートの自由記述欄では、「日本について良いイメージがあったから、私も外国の良いところをたくさん見つけたい」、「日本のイメージは違うこともあったから、日本の本当の状況ついて外国の人に伝えたい」などの記述があり、「日本人がどのように見られているのか」を考えさせる活動が、外国に対して積極的に関わろうとする態度を養うことにも効果的であったと考えられる。以上 2 点の開発の視点から、本研究では、小学校における「偏った情報により外国人に対するステレオタイプを作っていることに気づかせる授業」として、メディアリテラシー教育と異文化理解教育の双方の面から授業を開発・実践してきた。上述したように、メディアリテラシーの観点においては、「メディアから外国のイメージができている」という理解だけではなく、「外国について正しく理解するための情報の見方」にまで踏み込んだ授業をしていくことが今後の課題となったが、外国人との関わり方やメディアとの関わり方の双方の面で児童の意識の変化が見られたことが明らかとなり、双方の面から授業をおこなったことが意義のあるものであったと考える。

4. 今後の課題

授業実践の今後の課題として以下の 3 点を挙げる。

1点目は、メディアリテラシーの能力を身につけさせる授業として、「メディアから外国のイメージができている」という理解だけではなく、「外国について正しく理解するための情報の見方」にまで踏み込んだ授業をし、「多くの情報の中から正しいものを取捨選択していく」というところまで児童の意識の変化が見られるような授業を行うことである。

2点目は、児童に考えさせたいことを上手く引きだせるような発問にすることや、導入場面で問いかけたことを次の話し合いの場面に上手く活かしていくこと、など授業を工夫、改善していくことである。授業を実施した際には、「外国の人はなぜ、日本人のことをこのように思っているのでしょうか。」という発問に対し、初めは「おすしが有名だから。」「自分の国と日本を比べているから。」「外国に日本の製品があるから。」などが挙がり、「テレビなどメディアの情報から、イメージができている」ということがあまり出てこなかった。全体に投げかける発問としては「テレビなどの情報を見てイメージが作られている」という考えを引き出すには適切な発問ではなかったということが考えられる。

3点目は、ステレオタイプを強化しない授業、外国人児童により配慮した授業を行うことである。アンケート結果からも、ほとんどの児童たちは「持っているイメージが実際と違うこと」、「全員に当てはまるわけではないこと」を理解したと考えられ、ステレオタイプの強化には至らなかった授業であったと考えているが、外国についてあまりイメージを持っていない児童もいる中での実施がその児童のステレオタイプを構築してしまうことにつながる可能性があることも明らかとなった。実際、ある児童の授業後の感想欄には、「○○人は××だと分かった。」という記述のみがみられ、今まで持っていなかったイメージを持っただけで授業が終わってしまった児童もいたと考えられる。また、今後、浜松市の小学校のように外国人児童の在籍する学級で本研究のような「外国のイメージ」を扱う授業を行う場合には、ステレオタイプを強化する可能性だけでなく、外国人児童への配慮がより必要である。

---

1 浜松市教育委員会 HP
http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kyoiku/kyoiku/index.html 最終アクセス 2015.01.18
2 金沢吉展(1992)『異文化とつき合うための心理学』誠信書房 p.59
3 浅井亜紀子(1996)「異文化コミュニケーション教育としてのステレオタイプ研究－体験学習アプローチ－」駒澤女子短期大学研究紀要第 29 号 p.111
4 青木保(2001)『異文化理解』(岩波新書)p.107
5 堀田龍也(2004)『メディアとの付き合い方学習「情報」と共に生きる子どもたちのために』株式会社ジャストシステム pp.148－152
6 浜松市教育委員会 HP
http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/shido/gaikokunitunagarukonosien/jyoukyou.html　最終アクセス 2015.01.18
7 海外 16 地域での日本のイメージや興味・関心の調査 (2012)
www.dentsu.co.jp/news/release/2012/pdf/2012077-0704.pdf
最終アクセス 2014.12.15